　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　川崎支部支部長　山岸一雄　（執筆：河合・山岸））

**川崎支部便り　第45号　（2021年10月）**  
**オープンで各自が主役：川崎支部**

人生を豊かに（雑学のすすめ）

【新型コロナウイルスに有効な消毒・除菌方法】

　新型コロナウイルスはエンベロープという脂質製の膜に覆われています。アルコールや界面活性剤でエンベロープを壊せば、感染力を失います。

　手洗いの効果を見ると、手洗い（約100万個）⇒流水で15秒の手洗い（約1万個）（1/100なので99％除菌）⇒ハンドソープで10秒間もみ洗い後、流水で15秒すすぎ（約100個）（1/10,000）⇒

ハンドソープで10秒間もみ洗い後、流水で15秒すすぎ（2回）（数個）（1/1,000,000）

　（注意）手荒れを放置すると黄色ブドウ球菌が増えて、消毒剤が効きにくくなることがあります。

　（森　功次他：感染症学雑誌、80：496-500より）

川 崎 点 描 ： 川崎支部活動拠点

　【「忠臣蔵・赤穂事件」と「縁（ゆかり）」がある川崎市⑤】

【赤穂藩廃藩から吉良邸討入り迄】

（江戸諸藩士と国元藩士達との意見・意志調整）

　江戸詰めの家臣の堀部安兵衛をはじめとした高田軍兵衛、奥田孫太夫らは、打ち取る事に強く拘（こだわ）る強硬派（江戸急進派）で、吉良邸に討ち入る事を試みていたとのことですが、吉良の実の息子で出羽国（現在の山形県と秋田県）第4代藩主上杉綱憲（吉良上野介の長男・上杉家に養子入り）が吉良家を訪問する等警戒が厳しく、少人数では討ち入りが難しかった様でした。先程の三人は、以前国元に戻った時、籠城を強く進言した人達でしたが、大石は賛成しないで城を引き渡しました。

　後に討ち入りを決定するまでは、大石達の上方の主流派（上方漸進（ぜんしん）派）の最大目標は、浅野内匠頭の弟の浅野大学を擁立し、浅野家再興にありました。これには訳が有ります。上方漸進派（順を追ってだんだんに進むこと）の代表の大石は代々浅野家に仕えており、その上浅野家とも親戚関係にあるので、浅野内匠頭個人に仕えるというより浅野家そのものに仕える意識が強く、お家再興に拘ったのです。

　一方、江戸急進派の藩士達は堀部をはじめ、高田郡兵衛（＊1）や奥田孫太夫等は、浅野内匠頭の代から浅野家に仕えた人が多く、このため浅野家よりも浅野内匠頭個人に対して仕えているとの意志が強く、内匠頭の宿敵である吉良を討つ事、そして武士の面子を立てることに拘っていたと考えられます。

　（大石山科に隠棲（いんせい））

　大石内蔵助（1659年～1703年）は、1701年（元禄14年）6月（旧暦）、家族と山城国山科（京都）に隠棲しました。ここでも大石は幕府に対して、赤穂の遠林寺の僧祐海（＊2）を通じてお家再興の嘆願書を出しています。他の藩士達は、赤穂に近い大阪・伏見・京都等に住んでいた様です。

　幕府の許可を得て赤穂にとどまった藩士も多かったが、百姓や町人として住むことになりました。一方、江戸詰めの藩士はそのまま留まるものも多くいましたが、借家住まいとなりました。この頃までには、大石に起請文（きしょうもん）（人が[契約](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A5%91%E7%B4%84)を交わす際、それを破らないことを[神仏](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E4%BB%8F)に誓う[文書](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E6%9B%B8)）を出した同士は93人に増えていたそうです。

　この浅野内匠頭の刃傷事件は、江戸幕府が開始された1603年（徳川家康が征夷大将軍になった年）から、江戸幕府の中間期に入った時代でした。勿論幕府のスタート後、「大坂冬の陣」「大坂夏の陣」等もありました。1635年（寛永12年）には「参勤交代制の確立」、1637年（寛永14年）「島原の乱」、1657年（明暦3年）には「明暦の大火」等々ありましたが、その後の江戸の町民達の生活は徐々に安定してきた段階に入って来たのではないかと、私は思います。

　その様な江戸の町に、それも江戸城の中で刃傷沙汰事件が起き、事件当日中に切腹までさせられた事は、現代であれば臨時ニュースとして取り上げられる江戸での大事件であったと思います。当時のニュース伝達は「瓦版」（＊3）と人から人への口コミであったと思います。この事件は瓦版の盛りの時であり、江戸も平穏な時代に入っていた時の大事件であったので、瓦版も相当内容が詳しく書かれ、発行されたと思います。

　事件当初は浅野内匠頭の軽率な行動に非難の声が向けられた一方で、幕府による裁定の厳しさに対し、同情の声もあったのです。浅野が吉良に対して「遺恨（いこん）（うらみ）があり、それが「堪忍できぬもの」なら浅野の行動は「乱気」でも「不行跡」（ふぎょうせき）（品行の良くないこと）でもないはずと、浅野の行動に理解を示していることが「易水連快録」にあるとのことです。また、武士道の観点から言うと、売られた喧嘩を買わずに逃げるのは、武士にあるまじき不名誉な行為で、多くの批判もあった様です。

　以上の様な世評があったので、吉良は世間の目を意識して、高家肝煎（こうけきもいり）の辞職願を

出さなければならなくなり、吉良の傷は14～15日で治ったのに、わざと重く見せかけなければならなかったと言われています。吉良は1701年（元禄14年）3月26日（旧暦）にお役御免となり、1701年（元禄14年）8月13日には屋敷替えを拝命し、東京呉服橋の屋敷を召し上げられ、江戸郊外の本所松坂町に移り住むことになったのです。浅野家に対し、幕府も一方的な断罪を下した事の反省なのか、世論の浅野家への同情の声が高まった事もあったのか、大名屋敷の多い呉服橋より、人気の少ない本所は敵討に適した場所であり、世評の声の「討入り」に幕府が選んだ場所であったかもしれません。

　また、「江赤見聞記」（田中光郎著・赤穂城開城過程から討入り、切腹までを書いたもの）によると、呉服橋の吉良邸の隣りの蜂須賀飛騨守は、赤穂浪士の討入りをすでに警戒をして、その為の出費が嵩むという理由で老中に屋敷替えを願い出ていた事情が影響した可能性があると記しています。また、1701年（元禄14年）12月11日に、吉良上野介が幕府に出していた隠居願いの許可も下りました。

（＊1）「高田郡兵衛」は江戸時代前期の武士で、宝蔵院流高田派槍術開祖の高田吉次の孫と見られて

いるそうです。槍の名手といわれていたようです。

　最初は三河吉田藩（現在の愛知県豊橋市）の小笠原長重（旗本であり後の三河吉田藩の第４代藩主、その後武蔵の国岩槻初代藩主）に仕えました。その後、浅野家の家臣となり、刃傷事件、1701年（元禄14年3月14日（旧暦）後は堀部らと江戸急進派の一人でしたが、この刃傷事件の年の12月に突然脱盟しました。理由は旗本内田元知の養子となる様に進められたからです。本人は断ったそうですが、断われば「討入り」を訴えると言われ、仕方なく郡兵衛は「討ち入り計画」を口外しないとの条件で養子を受け入れたそうです。郡兵衛は江戸急進派の仲間には言えなかったのだと思います。

そのため　江戸急進派側からしては顔に泥を塗られた思いでしょう、その同志達は大変怒ったと言われています、しかし郡兵衛とすれば養子になる事は本意で無く本人も苦しんだ事と思います。結果47士の中には、入っていないのです。（Yahoo Japan Wikipedia）

（＊2）佐々木裕（広島県三次市出身）の「義士切腹　忠臣蔵の姫　阿久利」（小学館）をお勧めします。浅野内匠頭の夫人阿久利（瑤泉院）は、仇討ちも籠城も、切腹も望んでいませんが、忠死を覚悟する浪士たちを思い止まらせようと、綱吉の生母桂昌院へ御家再興の嘆願をはじめます。国家老だった大石内蔵助も、赤穂遠林寺の僧祐海を通じて、周旋を図ります。しかし、阿久利と内蔵助の努力も虚しく、御家再興はならず、吉良邸に討ち入りで吉良の首級を挙げた「義士」たちの助命を乞うべく、阿久利は再び力を尽くす物語です。

（＊3）瓦版の最古は、江戸時代初期の大阪冬の陣（1614年―慶長14年）大坂夏の陣（1615年―元和元年）の頃で、豊臣氏が滅んでいく情報を知らせる手段として使われたと思います。刃傷事件（1701年―元禄14年）で、前後の1681年（天和元年）～1704年（宝永元年）頃は瓦版が盛んに発行されました。

支部の活動

1. 2021.09.11（土）に第5回幹事会を開催し、川崎支部が貢献出来ることや川崎支部便り製本発行等の活発な意見交換が行われました。

②　緊急事態宣言が解除されたので、今年12月頃に「ミステリーツアー」を開催予定です。開催時　は川崎支部ホームページや校友会オンラインでご連絡します。

 ご存じですか

外国人（旭日中綬章）が日本に学んだ10のこと

  2014年に英国人マーチン・バローが旭日中綬章を受賞しました。前天皇から授与された理由は、英国で日本文化を広め、日英親善に貢献したことです。マーチンはジャーディン・マセソン商社日本社長等を務め、イギリス商工会議所の日本代表でもありました。ジャーディン・マセソン照会は、幕末から日本に深く関わり、長崎のグラバーは同商会の代理店でした。

マーチンは東日本大地震の直後に、日本人の姿に感動して、「日本から学ぶべき十点」を知人たちに発信しました。１．おだやか（カーム）さ、号泣し、泣きわめく姿をまったく見ることが無かった。個人の悲しみを内に秘め、悲しみそのものを昇華させた。　　２．尊厳（ディグニティ－）整然と列を作って、水や食料が渡されるのも待った。罵詈雑言や、奪い合いは一切なかった。　　３．能力（アビリティ－）驚きくべき建築技術。建物は揺れたものの、倒壊しなかった。　　４．気品（グレイス）人々は、必要なものだけを購入した。買い占めることなく、そのためすべての人が必要なものを手にすることが出来た。　　５．秩序（オーダー）車がクラクションを鳴らしたり、道路を占拠したりすることがまったくなかった。　　６．犠牲的行為（サクリファイス）福島第一原発で事故が起きた時に、50名の作業員が海水を注水するために、逃げずにその場で作業を続けた。彼らの犠牲的行為は、どう報いてあげられるだろうか。　　７．優しさ（テンダーネス）食堂は値段を下げ、ATMには警備が付くこともなく、そのまま使えるようにされた。弱者には、特に助けが差し伸べられた。　　８．訓練（トレーニング）老若男女の分け隔てなく、すべての人々がどうすれば良いかが分かっており、その通りに行動した。　　９．媒体（メディア）メディアは、冷静かつ穏やかに報道をした。　　10．良心（コンスィエンス）店で買い物をしている人々たちは、停電になると手にしていた商品を棚に戻して、店を出た。　　日本人が自然に身に着けていた高い倫理的な行動規範は、世界に感動を巻き起こしのです。

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：[k\_yamagishi@hexel.co.jp](mailto:k_yamagishi@hexel.co.jp) 山岸宛）